海城高校の生徒とプロ劇団員による舞台劇『ジュリアスシーザー』

2016.06

2016年6月海城中学高等学校にて『ジュリアス・シーザー（シェイクスピア）』の舞台劇が繰り広げられた。プロの演出家である田野邦彦氏の指導の元、海城高校1年生の有志の生徒と先生、プロの役者と一緒に作り上げる舞台劇を1日目は生徒に、2日目は保護者対象に披露した。

非常に難しく長いこの劇だが、練習期間は1ヶ月。それも、生徒たちは普段の部活動もやりつつ練習時間を確保し、本番に臨んだ。そのため生徒対象の披露の日が、通しで演技を行った最初の日だったという。

見ている生徒は同じ学年の生徒たち。その前で、難しい長い台詞を同じ学年の生徒が話している。それを見聞きしているうちに、見ている者は、どんどん引き込まれていった。「同じ学年の友人がこんな演技をしている…」劇が終わった瞬間に生徒たちは拍手喝采した。

観賞後すぐにペンを手にとり、アンケートに黙々と記す生徒たち。そこに書かれていたのは「あんな風に演技ができるなんてすごい」「あいつにこんな面があったんだな…と感激した」「なんだかわからない感覚に陥った」という賞賛の言葉の数々。「自分も出れば良かったな。一歩踏み出せばよかった。少し後悔した」という感想も見受けられた。それくらい大きな何かを感じたのだろう。

演技をした生徒たちも「とにかくうまく言えないけれども、やってみて本当によかった。楽しかった」と口々に言っていた。スポーツ等の試合とは違い、勝負の結果をわかりやすいかたちで得られない中、彼らたちは「やりきった」という満足した表情を見せていたのが印象的だった。

海城では中学2・3年生で、演劇手法を用いた「コミュニケーション授業」が行われていることもあり、演技に対する抵抗は少ないようだ。「コミュニケーション授業」では、外部講師の指導の元、生徒が短い劇を創作＆演技している。ただそれは、演技力というよりも、仲間と作り上げるというコミュニケーション力、それを伝える表現力などに重きが置かれている。

しかし今回の演劇は、今年度より始められた「芸術鑑賞の日」の一貫で行われた。中学1年生から高校2年の5年間で西洋的×東洋的＆過去×未来の4つのマトリックスの様々な切り口で芸術に触れることが目的とされている。西洋的×過去＝クラッシック音楽鑑賞、東洋的×古典芸能＝京劇など、学校外に出向き鑑賞を行った。完成された芸術を鑑賞するために…。しかし高校1年生だけは、学内でプロの演出家とともに、自分たちで完成された芸術を作り上げた。

仲間と協働して作品を創作した「コミュニケーション授業」とは異なり、今回は既成の作品の中で、自分がどう振る舞わなければならないかを受け止め、演じることが重要となった。芸術鑑賞という一つの作品に仕上げなければいけなかったのだ。

一方学年全員に向けて、事前に演劇家によるシェイクスピアの人物や作品に関する50分の授業が行われた。400年前に亡くなっているのにも関わらず、今なお演じられている秘密。「英語の台詞の韻律が心臓の鼓動と共鳴し、人の心の奥にまで届く」ことや、「息継ぎの決まりにのっとり台詞を話すと、苦しくなったり、心臓がドキドキしたり、サラっと言えたりと、自然に感情が込められるようにあらかじめ作られている」ことなどを体感していた。

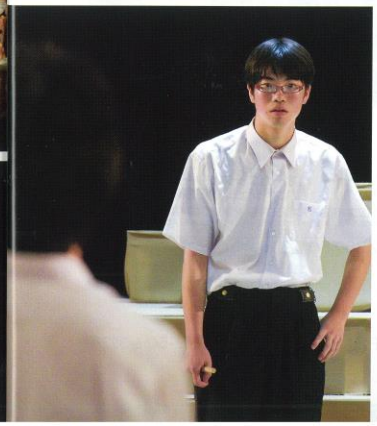
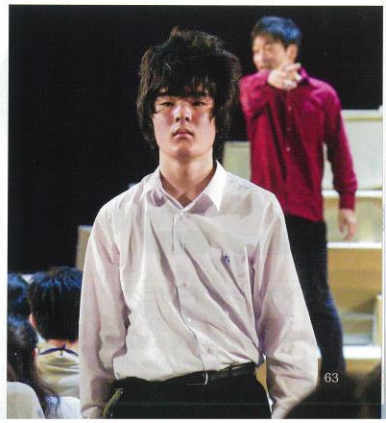
出演者たちは演技中にそれに挑戦をしていたが、おそらく見ている者全てが、そこに共鳴し引き込まれていっていたに違いない。

演者と観客の鼓動が一体となった素晴らしい時間だった。

＜あらすじ＞

戦争から戻ったジュリアス・シーザー。その功績から絶対的な権力を手中に収める。シーザーによる独裁が始まることを危惧したキャシアスと共和制を支持するその仲間たちは、シーザーの暗殺を企て、ついにはシーザーからの信頼も厚いブルータスを引き入れる。

暗殺を実行後、混乱する市民たちを前に演壇に立つブルータス。その演説に一度は納得する市民たちだが、シーザーの腹心であったアントニーが演説を始めると、事態は思わぬ方向へと転がり始める。

やがて、シーザーの意志を継ぐアントニーとオクテーヴィアス、そしてブルータスとキャシアスの率いる軍勢は、フィリパイでの運命の決戦を迎える・・・。

シェイクスピアの緊張感ある言葉が冴え渡る、男たちの権力争いのドラマ。